

第6回大学体育指導者養成研修会の参加報告

田中 ゆふ¹⁾, 松浪登久馬²⁾

Report of the 6th Training Workshop for Leaders of the University
Physical Education and Sports

Yufu M. Tanaka¹⁾, Tokuma Matsunami²⁾

2015年8月19日（水）から21日（金）に渡る3日間、立教大学池袋キャンパスにおいて第6回大学体育指導者養成研修会（主催：公益社団法人全国大学体育連合、後援：文部科学省、立教大学コミュニティ福祉学部）が開催された。この研修会は、大学に勤務する若手教員（非常勤講師も含む）や将来的に大学等における教育研究者を志す大学院生が主な参加者であり、自身の所属機関内での教育に対するFDが参加者の主目的である。さらには公益財団法人日本体育協会公認スポーツ指導者の資格更新のための義務研修、公益社団法人全国大学体育連合の大学体育研修精励賞の対象研修会にも位置づけられている。全体の参加者は38名であり、本学からは田中ゆふと松浪登久馬の2名が参加した。また、今回の研修会において松浪は大学体育研修精励賞を受賞した（大学体育 第106号 p.106）。大会日程は実技と講義、体験講習によって構成されており、大学体育教育を実施するうえで重要な知見・知識を一層深く、幅広く習得する機会となった。なお、本報告では、実技に関する内容は筆者が参加した「バレーボール」の内容に留める。

講演は、文部科学省講演、特別講演、講義の3つを聴講した。文部科学省講演では、「コーチング・イノベーション推進事業について」と題し、関伸夫氏（文部科学省スポーツ青少年局）が登壇された。2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けたコーチングの確立、さらには

長期的なスポーツの健全性の向上・維持を目的とした取り組みに関する内容のお話を伺った。特に印象的であったのは、グッドコーチに向けた「7つの提言」(コーチング推進コンソーシアム)である。グッドコーチに相応しい指導者の資質能力の中心にあるのは理念・哲学であり、それを中心として「人間力」「スポーツ知識・技能」があるという概念である。従来の指導者から選手という単方向的な考えではなく、両者との双方向的な関係性に焦点をおいた指導の必要性を強く認識させられた。大学体育教育の教員の立場においても重要な視点であり、授業の現場においても積極的に実践したいと深く考えさせられた。

特別講演では、安西祐一郎氏（全国大学体育連合会長）による「あるべき大学教員（指導者）像」と題したお話がなされた。最初に自己紹介としてご専門の認知科学の領域に触れられた。具体的にはDr. k. Anders Ericssonの熟達化理論にはじまり、体育における「知識・技術」と「学習・経験・熟達」との関連についてお話を伺った。さらに、「チームワークとは?」「コミュニケーションとは?」に対する大学教育での実例を挙げ、本当のコミュニケーションがとれるのは体育の授業であるとの見解を示された。結びに、あるべき指導者像として必要な要素として「人間性」「主体性」を取り上げられた。安西氏によれば「主体性とは、自分で的確な目標を見出し、その達成のために実践する能力」と定義される。そして、その

1) 近畿大学経営学部 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1

Faculty of Business Administration, Kinki University, 3-4-1 Kowakae, Higashiosaka, Osaka, 577-8502, Japan

連絡先：田中ゆふ ✉ ytanaka@bus.kindai.ac.jp

2) 近畿大学経営学部 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江3-4-1

Faculty of Business Administration, Kinki University, 3-4-1 Kowakae, Higashiosaka, Osaka, 577-8502, Japan

「主体性」は指導者と学習者（学生）の両方に必要なものであるとのことであった。先述の関氏のグッドコーチの内容と共通し、体育教育における双方向理解と自己の能力向上への努力の必要性への理解を深める内容であった。

講義では「映像を用いたオリンピック・パラリンピック教育」と題し、榎本直文氏（首都大学東京）のお話を聴講した。実際に複数のIOC公式記録映画、スポーツドラマ映画の2種類を観て、大学の講義において、それぞれの映像を使用する際の学習方法、意義、留意点についてお話を伺った。映像は非常にインパクトがあるため使用する際には非常に注意しなければならない、映像を作成するには必ず作成者の意図が含まれている点、しかし、生の体験では得られない視点から得られる情報もあるという点もある。この内容について特に印象が深かったのは「観よ、しかし騙されるな」という言葉であった。これは、映像を使用して授業を行う際には教員や学生がそのテーマ、時代状況や社会背景等の様々な基礎知識を習得していることが重要であることを意味しており、その知識に差があると同じ映像を観ても全く異なる見解や能力が身につくということであった。今後の授業においても「学生にどのような能力を身につけさせたいのか？」という点を整理したうえで授業を展開し、映像を通した深い理解を促すように心がけていきたい。

実技研修では、「バレーボール」「テニス」「クライミング」が開講され、2日間、計10時間の実

技研修を受けた。本学2名が参加した「バレーボール」の講師は田中博史氏（大東文化大学）、コーディネーターは村本和世氏（日本体育大学）であった。実施場所は立教大学池袋キャンパスボール・ラッシュ・アスレチック・センターであり、参加人数は14名であった。大学での実技15回の内容について、2回の講義を含み、理論的かつ実践的な指導を受けた。具体的な研修内容は表1に示す。

最初に、オリエンテーションでは、バレーボールの競技特性、歴史、心構え、ルール、ローテーション、フォーメーションの講義が行われた。ルールについてはパワーポイントを使ったクイズ形式の資料が提示された。講義・実技を通して競技の「本質」を伝えることが重要であることを強調されており、その後の実技においても「本質」という軸を一貫した研修がなされた。

その後の実技研修では、用具の設営と管理、ブレゲームの実施とアイスブレイキング、簡易ゲームが実施され、初日の研修は終了した。用具の設営と管理については、コート の床面・ライン、ボール、ネット、ボールカバー、アンテナ等の設営に関する注意点と設営方法、クランクの管理方法を指導いただいた。ネットの設営に関してはしっかり張ることと、ネットサイドの紐の結び方（写真1）、アンテナの設置方法について詳細に教わった。設置された様子は写真2を参照されたい。これらの用具の設置・管理については、授業運営上の安全に大きく関係していることであり、

表1 バレーボールの研修内容

-
1. オリエンテーション
 2. 用具の設営と管理【第2回】
 3. ブレゲームの実施とアイスブレイキング【第2回】
 4. パスの練習方法、レシーブと打撃動作の練習方法【第3回～第6回】
 5. スパイクの基本と応用練習方法【第7回】
 6. サーブの種類と練習方法【第8回】
 7. 審判法【共通】
 8. 3段戦法のリズムを用いたゲームの展開【第9回～10回】
 9. 7人制でのゲーム展開【共通】
 10. 6人制でのゲーム展開【共通】
-

（研修会配布資料を一部抜粋）

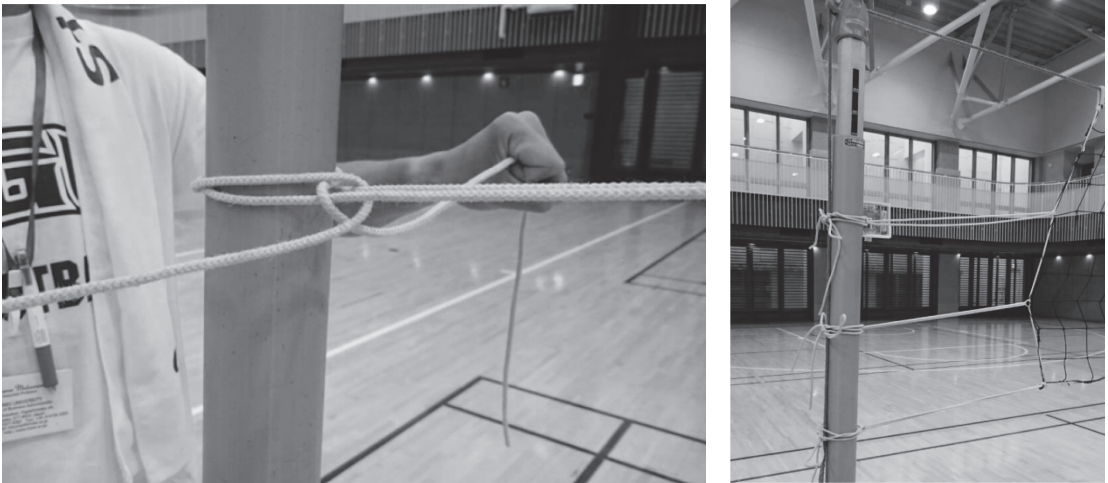


写真1 ネットサイドの紐を結ぶ様子（左）、完成したネットサイド（右）



写真2 設置したコートの様子

今後の授業でも慎重に留意すべき点であった。また、初回の授業時に学生同士が自己紹介を行い、その時に自身のニックネーム、バレーボールのレベル・経験を言うことで、その後の円滑なコミュニケーションや授業への取り組みに繋がること教わった。そのうえで円陣パスのアクティビティを行った。また、授業開始時に整列をさせること

で、授業の統率をとるコツも紹介された。

2日目は技術的な内容が主とされ、徐々に応用へと展開された。バレーボールの基本技術であるパスについては、アンダーハンドパス、オーバーハンドパスを、打撃動作についてはアタックについて、様々な練習方法を教授された。例えば、アンダーハンドパスにおける組み手の種類、ヒット

ポイント、腕の位置とボールの軌道について、実際にデモンストレーションをしながら理解を深めた。特にバスの練習においては、2人で向かい合い、成功例と失敗例をデモンストレーションできるようになることで技術的な知識も実際の動作も向上することを実感した。特に初心者が多い授業では有益な内容であると実感した。また、打撃動作では、ヒットポイントの作り方、ボールの回転のかけ方とその軌道について理解を深めた。

その後、再び講義が行われ、「バレーボールらしさ、本質」を追求するための攻撃と防御に関するレクチャーを受けた。ここでは、ローテーションやフォーメーションについてパワーポイントを用いた解説がなされ、例えば、サーブの際のポジショナルフォールト、様々な攻撃パターンについてより専門的な内容が挙げられた。加えて、実際の世界トップチームの映像を観てバレーボールの戦略と魅力も合わせて学習することができた。

講義を受けて、最後の実技は3段戦法の実践とゲームを行った。3段戦法では特に「リズム」を習得することに焦点が当てられ、様々な方法で練習を行った。ゲームにおいては講義にて、ポジションやフォーメーションの基礎知識を得ていたため、より攻撃のかつ戦略的に取り組むことができた。6人制ゲームを実施したが、メンバーのポジションの明確化、ローテーションや様々なフォーメーションを実践しより高度なレベルでのゲームができた。最後に1セットのゲームを行い2日目の実技研修を終えた。2日間に渡る実技研修では、体力・技術的には思い通りにできない部分が多々あったものの「バレーボールのおもしろさ」、「本質」に触れることができ、非常に楽しく取り組めた。今後の授業においても、バレーボールのみならず、あらゆる競技の「本質」を伝えるという点に主眼をおいて授業展開をする重要性を認識した。

最終日には、英語による体育授業の体験講習が行われた。講師はKelly F. McGrath氏（明治大学非常勤講師）、コーディネーターは石渡貴之氏（立教大学）であった。講習は全て英語で行われ、アイスブレイキング、マット上で様々な運動プロ

グラムやアクティビティを行った。大学教育の国際化が推進されている状況において、今後は各大学でも英語による授業が求められるであろう。海外での取り組みを体験できる貴重な機会となった。また、初日に行われた情報交換会では様々な大学や高等教育機関の先生方とも交流を深め、非常に充実した研修会となった。

このように、3日間の研修会を通して、大学体育教育実践のために必要な知識を多角的に、そして実践的に学んだ。この研修で得たことは、実際の講義や実技の授業において積極的に活用し、より良い大学体育教育の展開に努めたい。また、このような研修会には繰り返し参加し、一層の知識・技術習得のために取り組みたいと考えている。

平成 27 年 9 月 24 日受付

平成 28 年 1 月 27 日受理